

4年2組

 わたしが「ちゃんと生きる」ということ
 ～動物の命から考える道徳の授業から～


動物と生きる「人間(わたし)の責任」

Aさんが読んでいた保護ネコの物語から始まった「動物の命と、共に生きる者としての人間の責任」の授業。「ペット」「動物園の動物」「家畜」など、様々な形で人間の社会とつながる動物たち。低学年までの動物飼育の経験から、動物を「かわいい」と愛する存在として見てきたわたしたちでしたが、飼い主に捨てられたペットが殺処分されたり、繁殖を防ぐために不妊治療されたり、災害時に人間が避難した町に取り残されて餓死したり…。様々な現実に出合い直し、共に生きる人間としての責任を考えてきたある日、Bさんの学習カードには、次のような言葉が綴られていました。

(保護ネコの活動を続ける) Nさんが「命は待たないでやってくる」と言っているということは、無責任な人間がいなくなるということ。動物と人間が共に生きるということは、そもそも人間のエゴなのか。そしたら、「ペット」という存在をつくった人間が悪いのか。

私は、少し切なくなりました。Bさんの言葉から「人間が変われないのならば、動物と共に生きることはできない」という問いを感じたからです。でも、それは本当なのか。動物飼育を続け、今も心の中に動物たちを住まわせている子どもたちと、「わたしたちはできる」と感じながら、「わたしはどう在りたいのか」考えていきたいと思いました。

「お肉にする」のは殺処分と同じじゃないのか!

動物を取り巻く人間社会の現実に立ち向かっている人がいる。真に動物と共に生きることを模索している人がいる。「原発事故の動物を救うMさん」「捨て猫を保護するNさん」「親に捨てられた動物園の動物を自分の手で育てた飼育員のTさん」。わたしたちは、動物と共に生きようとする人たちの営みを資料から読み取り、その思いを「考えて綴る」ことを繰り返してきました。そんなある日、お乳の出ない乳牛のオスを直ぐに殺処分することなく、愛して育て、採算が合わなくてもお肉にして出荷しているYさんの営みについて、C君は、次のように語りました。

ぼくは、よくわからない。確かに、オスだからって生まれてすぐ殺処分したり、お肉にするにも、ただの「家畜」として名前も付けずに番号で呼んで、ただ大きくさせて殺したりするより、牛の幸せを考える牧場はすごいと思う。でも、結局お肉にするんでしょ。それって、まだ生きられるのに人間の都合で「殺す」ことでしょ? 寿命まで生かしてお肉にするのとは違うんだから、牛にとっては、人間の都合で殺されることに変わりがないから、牛を愛して、大切に育てて、お肉にしても、結局殺処分と同じで意味ないんじゃないの…。



Yさんの牧場で行っていることは素晴らしいという考えの中に生まれた問い。教室の中では、思いが分かれ、考えが溢れていきました。その日、次のようなことが、子どもたちから綴られました。

- ・確かにC君の言う通りだ…。同じ生き物として不公平だ。
- ・お肉にする。それは家畜としての運命。人間が決めたことだから…。
- ・Yさんは「牛に有意義な死を…」って語っていたけど、有意義な死って、人間の役に立つって意味なのかな…。

- ・オスだって（お乳が出なくても、お肉があまり取れなくても）、人間の役に立たなくても、愛されたいんじゃないの。愛されていていいんじゃないの…。
- ・同じように人間の手で死を迎えたとしても、愛されて死ぬのと、愛されなくて死ぬのでは、生きている時間があまりに違う。それは長さが大切なんじゃなくて、愛されたかどうか重要なんじゃないの。

C君の発言は、水面に投げられた小石のように、教室に波紋を広げていきました。私は、友の発言に響き合い、考えを深めていく子どもたちに惹かれました。それは、子どもたち自身も同じだったようで、D君は次のように綴りました。

- ・人間とくらす牛を愛したい。でも、お肉にするために殺す「変な矛盾」をどうにかしたい。矛盾だからどうにもできないけど、「考える学校」と「考えない政府」が人のちがいだと、自然に頭に入りました。

D君は、放射能汚染された牛を殺処分する政府の決定に、「他の方法があるかもしれないのに、なぜ一番簡単な決断をしたのか」と問いを持っていました。「考える学校」と「考えない政府」。一人の大人として、ドキッとするような言葉でした。でも、答えのない問いだけど、答えがないからこそ、明日も、これからも、みんなと考え続けようと思いました。

「ちゃんと生きる」ということ

次の日、E君が図書館から一冊の本を持ってきました。東日本大震災の原発事故で放射能汚染された牛の殺処分の決定に従うことなく、「もうお肉にならない肉牛」を育て続ける牛飼いのお話でした。私は、「これ、今ぼくたちが考えていることと一緒にない!」とE君が握りしめた本を受け取り、次の授業に向かっていきました。

授業冒頭で、E君に本を紹介してもらった後、みんなとその本を読みました。本の中でその牛飼いは何度も「オレ、牛飼いだからさ」と言います。また、売れない牛を育て続けること牧場の在り方について「オレたちに意味はあるのか」と問いかけます。最後は、「きめたんだ。おまえら（牛）とここにいる。意味があっても、なくてもな。」と言うのです。このことについて、子どもたちは、次のように綴り、語り合っていました。



- ・牛飼いは大変だ。本当はお肉にしないといけない。でも、ずっと牛といて、その牛がなくなってしまうたら、わたしなら牛を殺せない。その仕事をしていている人がいるから、ぼくたちは今日も、お肉を食べている。だから、この人もすごいけど、お肉にしている牛飼いにも感謝しないといけない。
- ・牛飼いの仕事は、牛を飼うこと。この人は、牛がいたから、牛飼いを続けられた。牛がみんな死んじゃったら、牛飼いじゃなくなっちゃう。牛がいたから、その町に残れた。牛と人間が共に生きるって、私たちが牛に支えられているということ。
- ・「意味がある」とか「意味がない」とか、多分関係ない。生きていること自体に意味があるから。でも、命の価値は、生きている長さじゃなくて、愛されているということなんじゃない？
- ・お肉になっても、寿命でも、いつか死んでしまう。でも、愛されている時間があるということは、きっと幸せだし、わたしだったら愛してほしい。
- ・お肉を食べるということは、命をもらっているということ。だから、僕たちがちゃんと生きないといけない。僕たちがちゃんと生きることが、命を大切にすること。

牛飼いは「牛飼い」として、教師は「教師」として、友だちは「友だち」として、自分の人生を「ちゃんと生きる」。社会の中で、誰かと「共に生きる者の責任」とは、隣の誰かに優しくしたり、助けたりするという単純なことではなく、自分自身が「ちゃんと生きる」ということだと、子どもたちは語ったのです。

今は、子どもたちと「君たちはどう生きるか」を題材に語り合っています。「ただ生きていく」のではなく、「ちゃんと生きる」ということ。それはどういうことなのか。わたしたちはそう在れるのか。これからも考え続けていこうと思います。